

# ローズマリ・サトクリフの『第九軍団のワシ』と『イーグル』 — 映画は何を伝えなかったか

小 柳 康 子

## I. 『第九軍団のワシ』(*The Eagle of the Ninth*)

ローズマリ・サトクリフ (1920~92) は、ステルス病という進行性の若年性関節リウマチと戦う生涯の中で、古代や中世に題材を取った少年少女向けの作品を多く残した。とりわけ、ローマ帝国支配下にあったブリテン島の歴史を踏まえて書かれた『第九軍団のワシ』(1954)、『銀の枝』(*The Silver Branch*, 1957)、『ともしびをかかげて』(*The Lantern Bearers*, 1959) は、「ローマン・ブリテン3部作」として、本国においてだけではなく、多くの国で読者を獲得し読み継がれている。ちなみに、サトクリフは後年、4世紀半ばのスコットランドに起こった戦闘を題材にした『辺境のオオカミ』(*Frontier Wolf*, 1980) を書いているため、ローマン・ブリテンに題材をとった作品群は「ローマン・ブリテン4部作」と総称されることもある。

綿密な時代考証に基づいて書かれたサトクリフの作品には若者の成長と友情をテーマにしたものが多く、このローマン・ブリテン3部作においてもそれは変わらない。しかしこれらの作品は年若い読者に向けられているが、成熟した大人をも十分満足させる内容を持っている。スリルに満ちた巧みな筋運び、激しい心の葛藤や戦闘場面と並行して現れる美しく忘れがたい自然描写などに加えて、ローマン・ブリテンという日本人には馴染みの薄い時代をしっかりと書き込んでいることもその一因であるだろう。

私が近年サトクリフの小説に惹かれるようになったのは、これまで手薄であったローマン・ブリテンの歴史を知りたいという欲求だけではなく、現在をよりよく生きるためには過去を辿ることが必要であることを学生たちに知ってほしいと願うためでもある。そのため3年前に「中世イギリス

文学・文化演習」を教えることになった時、中世からいささか遠ざかることは承知の上で、サトクリフの小説を読むことにした。1年目は準備不足のため彼女の作品を取り上げることはできなかったが、昨年度と今年度の2年間で3部作を何とか読み終わった。これらの作品の背景はローマン・ブリテン時代の軍隊であり、現在のものとは異なる地名や人名が頻出し、英語も平易ではないため、授業で取り上げるテキストとしては難しすぎたかもしれない。しかし学生たちはサトクリフの小説を通して、イギリスがアングロ・サクソン人到来以前、数百年に及ぶローマの支配下にあった歴史を知り、物事を広い視野で考える重要性を理解したのではないかと思う。

サトクリフは『第九軍団のワシ』を創作する際、2つの歴史的事実をつなぎ合わせたと次のように書いている。

Sometime about the year 117A.D., the Ninth Legion, which was stationed at Eburacum where York now stands, marched north to deal with a rising among the Caledonian tribes, and was never heard of again.

During the excavations at Silchester nearly eighteen hundred years later, there was dug up under the green fields which now cover the pavements of Calleva Atrebatum, a wingless Roman Eagle, a cast of which can be seen to this day in Reading Museum. Different people have had different ideas as to how it came to be there, but no one knows, just as no one knows what happened to the Ninth Legion after it marched into the northern mists.

It is from these two mysteries, brought together, that I have made the story of *The Eagle of the Ninth*. (Foreword)

ここで述べられている第九軍団というのは、ブリテン島がローマの支配下に入った紀元43年以降、この地に駐留していた4つの正規軍団のうちの1つを指す。現在のヨーク（York）にあたるエブラークム（Eburacum）に本拠を置いていた第九軍団は、紀元60年頃に起きたボウデッカ（Boudicca）

率いるイケニ族（Iceni）の反乱の制圧に参加してかなりの勢力を失ったことが知られている。彼らはその後2世紀前半にブリトン島から姿を消し、ローマ軍隊の歴史に現れることもなかったため、蜂起した北方部族の制圧に失敗して全滅したという説が有力とされてきた。しかし第九軍団は部族との戦いで全滅したのではなく、何らかの事情でブリテン島から引き揚げて解散し、軍団兵たちはヨーロッパ各地の軍団に編入されたというのが史実のようである。また、「シルチェスター（カレヴァ・アトレバートゥム）で19世紀に発掘され現在レディング博物館にある翼のないローマのワシ」というのは、1866年にシルチェスターのバシリカ（Basilica）から発掘された青銅製のワシのことである。これは古代には皇帝か神の彫像が手にする地球の上に取り付けられていた、軍隊とは無関係のワシだという。しかしサトクリフは、2世紀初頭に歴史から姿を消した第九軍団の謎と19世紀に発掘された翼のないワシを巧みに結びあわせて『第九軍団のワシ』を創作し、幅広い読者にローマン・ブリテン時代の胸躍る物語を読む喜びを与えてくれているのである。

『第九軍団のワシ』は、ローマ第二軍団の大隊600名を指揮する若き筆頭百人隊長マーカス・フラヴィウス・アクイラ（the Pilus Prior Centurion, the cohort Commander of the Second Legion）が、12年前に姿を消した第九軍団所属の父とワシの行方を探る目的を胸に秘めて、ブリテン島へ赴任してくる場面から始まる。紀元127年頃である。しかしほどなくマーカスは、任地イスカ・ダムノニオルム（Isca Dumnoniorum; 現在のエクセター）の砦を襲撃してきた部族との戦いで左足を負傷し、軍隊を去らざるを得なくなる。自らローマから遠い属州ブリテン島での軍団勤務を願い出たマーカスだったが、思い描いていた軍隊での生活を絶たれ、故郷エトルリアに帰ることもままならず、カレヴァに住む父の弟の退役軍人アクイラ叔父の家で傷を癒す身となった。

突然の挫折を受け入れることを迫られ、叔父の家で鬱々とした日々を送っていたマーカスは、サトゥルヌス祭の出し物である剣闘士の戦いを見

物に出かけ、そこでエスカ (Esca) という奴隷剣闘士に出会う。真剣勝負の戦いで殺されそうになったエスカを救い、彼を身辺の世話をする奴隷として雇い入れたマーカスは、主人と奴隷という立場を超えてエスカに友情を感じていく。エスカはブリガンテス族 (the Brigantes) の族長の息子で、マーカスが彼を買い取ったのは、エスカの中にローマ人とブリトン人、征服者と被征服者という立場の相違を超えて人間として通じ合うことのできる何かを見出したためであった。またアクイラ叔父の家に滞在中、マーカスは隣家に住むイケネ族のコティア (Cottia) という少女と出会いほのかな愛を感じるようになっていく。

足の傷もほとんど癒えた頃、叔父の旧友で「第六軍団総司令官クロディアス・ヒエロニアヌス (Claudius Hieronimianus, the Legate of Victrix, of the Sixth Legion) が部下を伴いカレヴァのアクイラ叔父の家に立ち寄り一晩を過ごした。その折マーカスは、ローマ軍団のワシが北方の部族の守り神となっているという噂があると聞かされる。これが事実だとすれば、第九軍団から略奪したワシを神と崇めるブリトン人のローマに対する反乱が起こるかもしれない。軍団としてはこれを確かめるべきがないというクロディアスに、マーカスは自分がエスカを連れて北方へ行き、そのワシを見つけて取り戻したいと申し出て許可された。父とワシの消えた謎を確かめる好機が訪れたのである。翌日マーカスはコティアに別れを告げ、ローマの支配の及ばないヴァレンシア (Valentia) とカレドニア (Caledonia) へと旅立った。

物語後半部は、マーカスとエスカが文明と未開の境界を画す「ハドリアヌスの長城」(the great Wall of Hadrian) を超えて北辺の地を巡り、エピダイ族 (the Epidaii) の間で神として崇められているワシを見つけ出して持ち帰るまでの話が中心となる。マーカスはこの旅の途中で二つの重要な出会いに遭遇する。最初は、トリノモンティウム (Trinomontium) で、グアーン (Guern) と名を変え、ブリトン人として生きている元第九軍団兵士との出会いである。彼は北方部族制圧に向かった第九軍団が反乱を起こして上官を殺害し、多くの者が脱走して内部崩壊していった有様を伝え、最後

まで少数の兵士と軍団に留まったマーカスの父が部族との戦いで戦死したと語った。ワシは最後まで父の手に握られていたという。二番目はカレドニアのエピダイ族の族長デルグディアン (Dergdian) との出会いである。デルグディアンの子供の眼病治療の名目で彼の家に滞在することになったマーカスは、若者の通過儀礼の祭りを見物に出かけ、祭司の手に握られているワシを目撃する。父が死ぬまで離さなかったローマのワシは、今ではブリトン人の神となっていることをマーカスは知ったのである。新月のもとで、アザラシ、オオカミ、アナグマなどの毛皮をまとい、吠え踊る男たちの描写には、未開の部族の迸るエネルギーが満ち溢れていて、3部作の中でも忘れがたい場面である。しかしマーカスの耳と目は、男たちの狂乱する姿ではなく、たった一つのものに注がれていた。

ワシのありかを突き止めたマーカスとエスカは周到な計画のもと、デルグディアンの家に泊まる最後の夜、ワシが祀られている「聖なる場」(Holy Place)、「生命の宿り場」(Place of Life) に忍び込む。漆黒の闇の中を、手に持つかすかな明かりを頼りに進んだ先に、ポールの先端に留められたワシは彼らを待っていた。

He lifted it from its place, realizing as he did so that the last Roman hand to touch the stained and battered shaft had been his father's. An odd, potent link across the years, and he held to it as to a talisman, as he set about freeing the Eagle from its staff. (202-203)

ワシを取り戻したマーカスとエスカはエピダイ族の追跡を逃れて南へ向かう。帰路は行きと同じく困難をきわめたが、二人はエピダイ族の執拗な追跡を、茂みに身を隠し、川に潜って逃れ、ハドリアヌスの長城に辿り着くことができた。そこから南下してカレヴァのアクイラ叔父の家に戻ったマーカスは、アクイラ叔父とクローディアスに、取り戻したワシを差し出したのである。

ワシが部族のもとから取り戻され、父の名誉も回復されたが、第九軍団

はすでにない。マーカスは父の愛していた第九軍団をこのワシのもとに再編成してほしいと願ったが、ローマがそれを許すはずもなかった。不名誉な形で消滅した軍団のワシは、その存在が知られぬように消えるほかないのである。ワシはマーカス、エスカ、アクイラ叔父、クローディアスだけに見守られて、叔父の家の床下に丁重に埋められた。

Marcus had brought the Eagle down from the watch-tower, carrying it as he had carried it so many miles and slept with it so many nights, in the crook of his arm. And while the others watched in silence, he had knelt down and laid it in the small square cist that reached down through the hypercaust into the dark earth beneath. He had laid it—no longer bundled in tattered violet cloth—on his old military cloak, and drawn the scarlet folds closely over it with a gentle hand. He had been very proud to wear that cloak; it was fitting that his father’s Eagle should have it now....

“Here lies the Eagle of the Ninth Legion, the Hispana,” the Legate was saying. “Many times it found honour in the wars, against foes abroad and rebellion at home. Shame came to it; but at the end it was honourably held until the last of those who held it died beneath its wings. It has led brave men. Let it lie forgotten.” (276-277)

第九軍団の再編成はかなわなかったが、父の名誉を回復しローマのワシを取り戻したマーカスは元老院から特別の報奨を与えられ、エスカもローマ市民となることができた。そしてマーカスは故郷エトルリアへの思いを断ち切り、コティアと共にブリテン島で生きる決意を固める。自由民エスカは自らの意思でマーカスのために働くことになるだろう。

床下に埋められたワシは、3世紀末にブリテン島を短期間支配したカラウシス(Carausius)とアレクトゥス(Allectus)の権力闘争を背景とする次作『銀の枝』で、マーカスの子孫ジャスティン(Tiberius Lucius Justinianus)とフラビウス(Marcelus Flavius Aquila)の大伯母ホノリア(Aunt Honoria)の

家の床下から発見されて、二人の若者に一族の血脈を自覚させ、不正をただす彼らの行動の源となる重要な役割を担うことになる。

## Ⅱ. 『イーグル』(*The Eagle*)

『第九軍団のワシ』は2010年に『イーグル』というタイトルを付けて製作され、アメリカとイギリスで2011年に封切られた。日本では未公開なので、海外から購入したDVDを見たが、文学作品の映画化に時々みられる、原作の大幅な変更はそれほど多くなかった。しかしサトクリフの小説の読者には大事だと思われるところが削除されたり変更されたりもしていたため、いささかの不満は残る。文学作品の映画化には製作側の取捨選択が働くため、文学と映画は別物として楽しむものだということを承知の上で、映画では何が変わられ、伝えられていないのかを紹介する。

### 1. エスカ

エスカのマーカスの奴隷であり友人であるという役割は小説でも映画でも変わらず、マーカスと主役の座を分け合う人物となっているが、マーカスが彼を自分の奴隷にする経緯と、自由民にする経緯は原作と異なっている。マーカスは闘技場で戦うエスカを見て、彼を自分の奴隷として買い受けるのだが、それは、相手に殺されそうになるエスカの目に、慈悲を拒む強さを見たからである。しかし映画では、エスカを買うのはアクイラ叔父で、マーカスが叔父の家で目を覚ますと、エスカが叔父に伴われて部屋に入ってくるという設定になっているのだ。これではマーカスが初めからエスカに自分と共感できるものを持つ男だからこそ、主人と奴隷の関係を越えた友情がなりたつという前提が崩れるだけではなく、その後の友情の深まりの力も薄められることになるのではないだろうか。またエスカは闘技場で攻撃をせず倒されてばかりであるが、これは、マーカスではなく叔父が彼を買う設定から当然だとしても、このようなエスカの描かれ方では、彼が剣闘士である必然性は薄い。

エスカが奴隷から解放される場面は『第九軍団のワシ』の中でもとりわけ印象的な場面だが、これも原作とは異なっている。マーカスはワシを探す旅に出る前、エスカに「奴隷解放証書」(manumission)を渡す。いぶかるエスカにマーカスは、「拒絶する自由を持たない奴隷に危険な旅と一緒に来いと頼むべきではないが、友達になら一緒に行ってくれと頼むことができる」(‘I should never have asked you to come with me into this hazard when you were not free to refuse....No one should ask a slave to go with him on such a hunting trail; but—he might ask a friend.’ 130) と、彼をあえて旅の前に自由にするのである。だが映画では、エスカが自由になるのは終盤になってからである。ワシを取り戻しての帰路、マーカスの負傷した足が痛みだし、彼はエスカに自分を置いてワシを持って逃げろと命じる。エスカはこの命令に従いたくないのだが、奴隷の身でそれはできない。そのためエスカは自らマーカスに自由を与えてくれと頼む。奴隷のエスカが主人マーカスに自由を求め、自分に逃げるよう命じる主人に「逃げない」と言う権利を得るのである。エスカがこのように優位に立っているのは、この場面の前で、二人が部族につかまりそうになった時、エスカがマーカスを自分の奴隷だと偽り、殺されることだけは免れようとする、原作にはないシーンがあるからである。エスカの言葉は敵を欺くためのものであったにせよ、ブリトン人の手前、マーカスに暴力を振るうエスカの表情から、主客転倒した関係の心地よさを彼が味わっていることを読み取ることもできる。

## 2. コティア

マーカスは負傷してアクイラ叔父の家に滞在中、隣家の裕福なローマ化したブリトン人カエソ (Kaeso) とバラリア (Valaria) 夫妻の家に預けられているコティアと知り合い仲良くなっていく。イケニ族のコティアは、ローマ風を身につけようとしている叔母バラリアにカミラ (Camilla) と呼ばれることを嫌う、つまりローマ風を嫌いブリトン人であることを誇りに思っている娘である。マーカスは名誉の負傷により与えられた腕輪をコティアに託して旅に出、彼女は一年後美しく成長した姿でマーカスの前に

現れる。サトクリフの世界では、マーカスとコティアが結婚して丘陵地帯に家を購入して農場を経営していくことにより、彼の子孫が主人公となる『銀の枝』と『ともしびをかかげて』が成り立つのである。コティアが出てこないということは、マーカスはエスカー人を通してブリトン人を理解することになるということであり、彼のブリトン人理解は一面的なものに過ぎないと言うことにもなる。コティア、彼女の乳母ニッサ (Nissa)、ブリトン人の妻グイヌマラ (Guinhumara) など原作で自分の言葉を発する女性は全く登場しない『イーグル』は同性愛者向け映画と揶揄されてもいるようだが、それも一理あると思わせるほどこの映画では徹底した女性排除が貫かれている。

### 3. グアーンと第九軍団元兵士

グアーンは映画でも原作と同じ第九軍団の元兵士として出てくるが、原作にはない人物は第九軍団の元兵士たちである。彼らはマーカスたちがワシを取り戻した後アザラシ族に追い詰められた時、グアーンと共に突然マーカスの前に現れる。髪も白くなり肥満してはいるが、昔の軍服を着こみ盾を手にした元兵士たちは勇敢に戦い死んでゆく。軍団の名誉のためにマーカスの助けに来たとだけされている彼らが、これまでどこでどのような生活をしていたのは画面からは全く伝わってこない。これとは対照的に、原作にも登場する元軍団兵グアーンは、一緒に逃げようというマーカスの誘いを、今は妻子もあり部族の人間として生きていと断る。サトクリフは彼を通して、過ぎてしまった時間を取り戻すすべはないという厳しい真実を示しているのだが、元軍団兵たちはこのように考えるタイプの人間ではないようだ。彼らはローマ人とブリトン人の激しい戦闘場面が必要とした不自然さをかもしだす人物だといえるだろう。

### 4. ワシ

取り戻されたワシは小説中では、両翼をもがれ傷ついていたが、それにも関わらず両眼は鋭く威厳を保っていた。この姿は激しい戦闘の結果を物

語ると同時に、ワシの雄々しい姿を読者に忘れがたく焼き付ける働きをする。映画ではしかし、ワシは両翼を持つ完全な姿をしている。翼のないワシを映像化すると、威厳がそがれ、惨めさが強調される危険性を考えてこのようにしたのかも知れないが、かなり失望させられるワシの姿である。想像力によって不完全の中に完全性を見るという作業は、活字を読むからこそ可能になるものなのだろうか。

## 5. エピダイ族

エピダイ族は父を殺してワシを奪いそれを守り神にしているという意味ではマーカスの敵であるが、彼らは凶悪で野蛮な人間ではない。特にマーカスの父の最期を知るデルグディアン之父トラデュイ (Tradui) は、父の指からエメラルドの指輪を抜き取った男だが、ワシを盗んだマーカスを追いかける孫に、この指輪を正当な持ち主マーカスに返すよう持たせてやる。この行為は、彼が正邪を知る男であることを伝えている。彼のこの行為は、エメラルドの指輪が重要な役割を果たすローマン・ブリテン3部作を成立させる重要な意味を持っているということである。

これとは対照的に映画では、ワシを所持している部族たちの誰一人にも、トラデュイのこのような人間性は付与されてない。彼らはローマ人を敵とみなし、激しい憎しみによってマーカスの命を狙う徹底した悪役とされている。従ってコティアの削除と同じく、サトクリフが提起するローマ人とブリトン人の和解のテーマはこの映画では再び矮小化されてしまっているということになる。

## 6. 結末

ワシはアクイラ叔父の家の床下に埋められ、第九軍団の再編成もされることはなかったが、映画ではワシを持ち帰ったことが公にされ、家名も回復されて軍団の再編成もなされることが暗示されている。DVDの特典映像「別の結末」では、ワシがグアーンと共に火葬されるシーンも撮影されていた。マーカスがグアーンの死体の上にワシを乗せた時驚くエスカに「ワ

シはローマのものではなく、死者のためのものだ」というセリフもある。この結末は正編では採用されていないが、ワシが公にされ軍団が再編成される『イーグル』の結末は、あまりに安易なものだといわざるを得ない。

## 7. キャスト

主人公マーカスはアメリカ人俳優チャニング・テイタム (Channing Tatum) が演じている。インターネット記事によると、テイタムは幼い時から武道を習い、様々なスポーツもこなす男性で、モデルとして働いたのち俳優となったということである。演技が平板 (uninspired) という評もあるようだが、確かに負傷して除隊せざるを得ない若い軍人役であるから、表情は全編を通して固く厳しいものに終始している。笑顔のシーンは最後の場面を除けばほとんどない。ただこれはコティアとのふれあいや母を殺されたオオカミとの交流の場面が完全に削除されているためでもあるだろう。荒々しい男どもだけに囲まれているマーカスにはどのようにして内に秘めた温かい心を示すことが可能だったろうか。

『イーグル』が『第九軍団のワシ』と異なる箇所を幾つか考察してきたが、映画だからこそ味わうことのできる場面も数多くあることは言うまでもない。特に実際のスコットランドでロケをしたという荒涼とした風景や、マーカスがワシを目撃する祭りのシーン、アザラシ族の若きリーダーが死んで川の水につかると、それまで全身に塗られていた染料が流れて、その下からあどけないともいえる顔が現れるシーンなどは、文字だけでは伝わらないイメージを明瞭に伝えてくれる。

『第九軍団のワシ』は、優れた小説がそうであるように、10代の少年少女からシニア世代まで幅広く楽しむことのできる作品であるため、読者の年代によって見出すことのできるテーマも様々である。若者が人生の早い時期に体験する挫折を乗り越える物語でもあり、失われた父を探す家族物語でもあり、若者の友情物語でもある。また、これは、征服者・支配者であるローマ人と被征服者であるブリトン人がいかにして対立を乗り越えて

いけるのかという新しい切り口で読むことも可能である。

『イーグル』はこのような『第九軍団のワシ』の様々なテーマをマーカスとエスカの友情に絞り、「ローマン・ブリテン3部作」の一部であることを考慮に入れず出来上がっている。しかし私たちは『イーグル』を、サトクリフの原作とは異なるが、その雰囲気は伝えてくれる、舞台をローマン・ブリテンに設定したアクション映画として楽しむことはできるのである。

#### 参考文献

- Bédoyère, Guy de la. *Roman Britain: A New History*. London: Thames & Hudson, 2010.
- Casey, P.J. *The British Usurpers: Carausius and Allectus*. New Haven and London: Yale UP, 1994.
- Fields, Nic. *Boudicca's Rebellion AD 60-61: The Britons Rise up against Rome*. Oxford: Osprey Publishing, 2011.
- Ireland, Stanley. *Roman Britain: A Sourcebook*. London and New York: Routledge, 2008.
- Meek, Margaret. *Rosemary Sutcliff*. New York: Henry Z. Walck, Incorporated. 1962.
- Sutcliff, Rosemary. *The Eagle of the Ninth*. Oxford: Oxford UP, 2004.
- \_\_\_\_\_. *The Silver Branch*. Oxford: Oxford UP, 2007.
- \_\_\_\_\_. *The Lantern Bearers*. Oxford: Oxford UP, 2007.
- エイドリアン・ゴールズワージー『古代ローマ軍団大百科』池田裕ほか訳、東京、東洋書林、2005。
- 南川高志『海のかなたのローマ帝国：古代ローマとブリテン島』、東京、岩波書店、2004。
- ピーター・サルウェイ編『ブリテン諸島の歴史1 ローマ帝国時代のブリテン島』南川高志監訳、慶應義塾大学出版会、2011。
- ローズマリ・サトクリフ『思い出の青い丘：サトクリフ自伝』猪熊洋子訳、東京、岩波書店、2005。
- \_\_\_\_\_. 『第九軍団のワシ』猪熊葉子訳、東京、岩波書店、2007。
- The Eagle* (DVD). Universal, 2011.
- [http://en.wikipedia.org/wiki/The\\_Eagle\\_\(2011\\_film\)](http://en.wikipedia.org/wiki/The_Eagle_(2011_film)).